違ってこれからも阿門達の助けになれる。
「龍麻さんが戻ってきたら夕食に行く約束をしてるんだけど、皆守も一緒にどう？」
「そうだな。まだ数時間はあるが……まあ良いか」
何かして時間を潰さないと、沈黙は微妙に居心地が悪い。
皆守は腕を伸ばし、もてあそんでいたアロマパイプを胸ポケットにしまいこむ。
「吸わないの？」
「ここは龍麻の部屋だ。あいつは自分のベッドやカーテンに匂いが移るのが好きじゃないみたいだからな」
「そうなんだ。おれは好きだけどな、そのラベンダー」
部屋に、服に、彼自身に染みついた甘い香り。おれがこの部屋の主だった頃はここにも甘い香りは常に残っていた。
（最近九龍くんからもラベンダーの匂いがするんだよね）
皆守の部屋に泊まった翌朝、八千穂ちゃんにそんな風に言われた事すらあった。
懐かしい香りに胸が騒いで、手持ちぶさたなままおれのすぐ横に投げだされた彼の手に触れたいと思ってしまう。
ひかれるかなと危ぶみながら右手で彼の左手をとった。
「ん？」
「皆守、手綺麗だよね。あ、でもここちょっと固くなってる」
パイプを持つ指の長さや浮きだした関節の形は以前のままだった。けれど補習中にノートだ問題集だと色々やらされているからだろうか。左利きの皆守の中指の先は僅かに固く膨らんでいる。このままのペースでちゃんと勉強したら、近いうちにペンだこができるんじゃないだろうか。
「雛川が課題を出しすぎなんだろ」
「そういう風に言うなよ。やらなきゃ留年だ。で、雛川先生以外に冬休み返上の補習につき合ってくれる先生なんていないよ」
「……まあ、な」
手を持ちあげて指先に唇を押しあてると、さすがに皆守も焦ったようだった。
「お、おい。葉佩？」
ただあっけにとられているのかそれともこちらの出方を窺っているのか、振り払われる事は無い。やがておそるおそるといった風に問いかけてくる。
「なあ、何かあったのか？」
おれの頭の中なんて触りたいなとかそんな欲求しかなかったのに、皆守は心配してくれているんだ。